

春秋彩

Syunjusai

特集

「熊本県立大学15年の歩み」… 2

活躍する卒業生 …… 7

国際交流 …… 8

研究活動紹介 …… 10

大学の動き・Information …… 12

活き活き元気種 …… 14

大学からのお知らせ・おすすめの1冊 …… 15



 熊本県立大学

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2009 spring

vol. 30



理事長
荻茂 寿太郎

グローバルとローカルを合わせてグローバルと呼ぶことがあります。本学のスローガン「地域に生き、世界に伸びる」は正にこのグローバルの精神から掲げられました。グローバル社会を迎えて一喜一憂していた矢先、この社会にすっかり翻弄され、その怖さも知ったところです。

さて本号では「熊本県立大学15年」を特集しました。前身である熊本女子大学を含めて60年が過ぎ、男女共学と同時に熊本県立大学に改名しました。60年前、熊本に県立の女子大が誕生したのも、15年前にユニバーサルな公立大学に衣替えしたのにもグローバルの精神が背景にあったことです。熊本女子大学が根底にあるから生活文化に強い大学となり、熊本県立大学だから地域貢献度が高い大学なのは当然でしょう。1994年までの45年の歴史と伝統とは別に、加えてそれ以後の15年の歴史を未来の糧にすることを強く意識しなければなりません。熊本の地域発展をけん引する大学であり続けるために何が重要かを常に問いたいと思います。

法人化4年目となる今年、従来の就職センターを発展改組して装い新たにキャリアセンターとしました。昨年スタートのキャリア支援の教育プログラムが先行して看板の掛け替えとなったわけです。この学生たちのキャリア拠点もまたグローバルとローカルの両面から光り輝く存在でなければならないと思っています。

年表で見る熊本県立大学15年の歩み…。

熊本県立大学1

平成6年4月

- 大学名称を熊本県立大学に変更（シンボルマーク制定）
- 全学的に男女共学に移行
- 学部増設 総合管理学部／総合管理学科
- 文学部学科名称変更 国文学科 → 日本語日本文学科
英文学科 → 英語英米文学科

平成9年

- 開学50周年（記念行事の実施、記念誌発刊、大学歌制定）

平成9年9月

- アメリカ・モンタナ州立大学
ボーズマン校及びビリングス校と学生交流協定締結

平成10年4月

- 大学院研究科増設
アドミニストレーション研究科／
アドミニストレーション専攻（修士課程）

平成11年4月

- 生活科学部を環境共生学部へ改組
環境共生学部／環境共生学科／生態・環境資源学専攻
居住環境学専攻
食・健康環境学専攻

平成12年4月

- 大学院博士課程設置
アドミニストレーション研究科／
アドミニストレーション専攻（博士課程）

平成15年4月

- 大学院研究科増設
環境共生学研究科／環境共生学専攻（修士課程）

平成17年4月

- 大学院博士課程増設
環境共生学研究科／環境共生学専攻（博士課程）

平成18年4月

- 公立大学法人熊本県立大学へ移行
学術情報メディアセンター設置・地域連携センター設置
包括協定制度整備

平成19年

- 開学60周年
（記念シンポジウム「春夏秋冬…進歩」開催、
高連携 "SUMMER COLLEGE" 開催）
協力講座開講

平成20年4月

- 大学院博士課程増設
文学研究科／日本語日本文学専攻（博士課程）
- 環境共生学部学科改組
環境共生学科 → 環境資源学科、居住環境学科、食健康科学科

平成21年4月

- キャリアセンター設置

5年の歩み

熊本県立大学が男女共学の総合大学として新たなスタートをきってから、今年で15年目を迎えました。
この間の歩みについて振り返ってみたいと思います。

●シンボルマーク制定

熊本県立大学のスタートと同時に制定したシンボルマークは、「時代と地域の要請に応える大学」をイメージ。「黒」は地域と大学の伝統、「赤」は、世界に向かって力強く伸びていく先進性と若々しい躍動感を表しています。制作者は、グラフィックデザイナーの永井一正氏。



●大学歌制定

21世紀をつくる新しい人材を育成する大学にふさわしい、若い人にも親しめる大学歌をつくろうと、平成8年に歌詞公募を行い、213件の応募の中から、宇内悦子氏の「宙へ」が最優秀作品に選ばれました。作曲は、作曲家の三枝成彰氏。



●協定校

平成元年の韓国・祥明女子大（現在の祥明大）との姉妹提携に続き、アメリカ・モンタナ州立大学ボーズマン校及びビルリクス校と学生交流協定締結。

現在、ワイルダック大学（タイ）、韓国海洋大（大韓民国）、広西大（中華人民共和国）、台北科技大とも大学間での交流を深めています。



●記念誌「環境共生学部10年の歩み」を発行

平成11年4月に、新しい視野から人間活動と自然環境の積極的な調和を目指して、生活科学部を環境共生学部へ改組。今年は、学部改組後10年目の節目の年であり、記念フォーラムを開催するとともに3月末に記念誌「環境共生学部10年の歩み」を発行しました。

●「公立大学法人熊本県立大学」の看板除幕

「公立大学法人熊本県立大学」の看板を新調し、新たな門出を祝いました。

看板は、平成18年3月に本学総合管理学部を卒業した新進気鋭の書道家武田双龍さんの揮毫によるものです。



●包括協定制制度整備

本学と自治体・企業等が地域の様々な課題解決のために協力することを目的に協定を締結する「包括協定制」を平成18年度に整備。平成21年2月末現在1企業、11自治体、1試験研究機関と包括協定を締結し、連携した様々な活動を行っています。

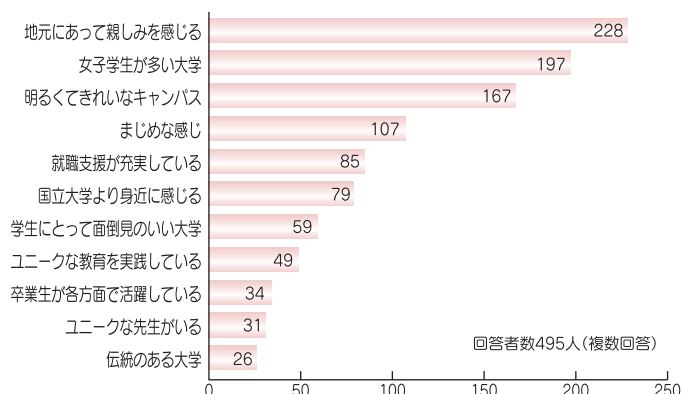
【包括協定締結団体】富士電機システムズ株式会社、阿蘇郡小国町、球磨郡あさぎり町、玉名郡和水町、菊池郡菊陽町、天草市、水俣市、宇城市、菊池市、菊池郡大津町、人吉市、上益城郡御船町、熊本県農業研究センター（締結順）



環境学校：本学と富士電機グループ、玉名郡和水町が協力して開催（H21.11.1）

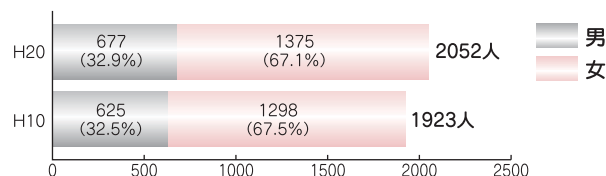
新入生が描く 熊本県立大学のイメージ

昨年度実施した新入生アンケート調査では、495人（内訳 男：157人 女：338人）の新入生にご協力いただきました。「あなたは、熊本県立大学に入学するまで本学に対してどのようなイメージを持っていたか？（複数回答可）」という設問に対しては、「地元にあって親しみやすい」、「女子学生が多い」、「明るくてキャンパスがきれい」という意見が上位を占めました。



5月1日現在の学生数における男女の割合

学生数における男女の割合は、男女共学に完全に移行した平成10年と平成20年を比較してみても、ともに男子学生が約3割に対し、女子学生が約7割を占め、イメージ調査の結果にもあるように女子学生が多い大学です。



卒業生が振り返る熊本県立大学の思い出

熊本県立大学に移行してから、平成19年度までに5,548名の方が卒業されています。

今回は、男女共学移行後の熊本県立大学に入学し、現在、多方面で活躍されている卒業生の方に、当時の思い出を振り返っていただきました。



熊本県健康危機管理課 主任主事

宮原 薫

(総合管理学部 総合管理学科 1998年卒)

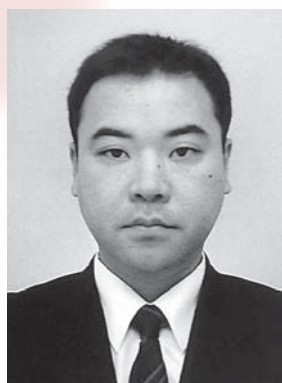
白亜の校舎、大きな図書館、噴水のある池など、すべてが輝いて見え、ここで新しい生活を送りたいという思いから、私は熊本県立大学への進学を決意しました。

入学当時は総合管理学部の人数が圧倒的に多く、その約半数は男子だったので「元女子大」という実感はあまりありませんでした。

一期生ということで、授業や教授の情報が学部先輩から得られず、試験前は苦労したことも今ではいい思い出です。

就職活動では、公務員講座、論文の添削、面接の練習、強化合宿とひとかたならぬご指導、ご支援をいただきました。私が今、熊本県の職員として仕事をする事ができるのも、教職員の方々の指導のおかげです。

熊本県立大学では、地域に根ざした教育研究活動が数多く行われていますが、そういった活動は、地域に貢献するとともに、学生にとっては貴重な体験をする場所だと思います。今後とも「地域に生き、世界に伸びる」のスローガンのもとすばらしい人材を育てていっていただきたいと思います。



福岡県立久留米高等学校 講師

安川 基明

(文学部 日本語日本文学科 2001年卒)

私が入学したのは、熊本県立大学が共学になってから二年目の時代でした。大学の印象としては、新しいものと古いものが入り交じり、過渡期の印象がありました。女子大の名残として感じたのは、緩やかで穏やかな空気でした。

また、学校から早くに人の気配が無くなるのが不思議でした。聞けば、女子大時代からとのことでした。ひっそりと佇む白亜の象牙の塔の中で、研究室で、サークル棟の部室で、場違いに騒いでいたことを思い出します。他の大学との交流会でも、おとなしい県立大学生という先入観をもたれていたものでした。負けじと暴虎馮河の勢いで飲み倒していたのを、今では懐かしく思い出します。

共学になって、久しくなりました。あの頃とは雰囲気も違うと思います。良き伝統を育みながらも、良い意味での活力ある大学でありますよう、期待いたします。



金剛(株)企画チーム 主任
木本 拓郎
(総合管理学部 総合管理学科 1998年卒)

私は平成6年に熊本県立大学・男子第一期生として入学しました。学生生活は他学の男子学生と大して変わらなかったと思いますが、就職活動では大変苦労しました。OBはいない、大学の知名度も低いという中で、まさに手探りで懸命に活動したことを覚えています。

卒業後、ゼミ担当の立山先生やその後を引き継がれた棟方先生は民間企業出身で実務経験が豊富なため、多くの参考になるアドバイスや情報を頂くことが出来ました。私は今でも先生方と緊密な「つながり」を持ち続けていますが、それは私の財産であり人的ネットワークの広がりやの起点ともなっています。

学生も社会人も人間はすべて自らが動かなければ何も変わりません。その時の相談相手として友人や恩師が欠かせませんが、卒業後にはどうしても「つながり」が乏しくなります。そういう意味で大学はそのような情報源やネットワーク作りの起点であると改めて考えているところです。



熊本県立大学 環境共生学部 助手
我如古 菜月
(環境共生学部 環境共生学科 2003年卒)

私は、環境共生学部の第一期生として入学し、昨年4月、本学に着任しました。環境共生学部は今年、学部発足以来10年を迎えます。この機会に、当時を振り返ってみたいと思います。

私は食・健康環境学専攻に所属していたのですが、「環境共生学部」の名のとおり、環境について幅広く学ぶことが出来ました。1、2年生の学部共通科目・基幹科目には、3専攻それぞれの視点から見た「環境」についての講義が多くありました。オムニバスの講義では、学内外の多くの先生方から貴重なお話も聞けました。「食」という視点から、「環境」というフィールドを総合的に捉え、理解が深まったことは、最近よく話題にされる「食育」や「食の安全性」といった問題を考えるうえでも大変役立ちました。また、これからの研究・教育活動を進めていく上でも貴重な財産になってくると考えています。

大学を取り巻く状況は厳しくなり、この10年で社会から求められる大学・学部像は大きく変わってきています。今だからこそ、環境共生学部の理念に立ち返り、「熊本県立大学環境共生学部だからこそできること」を常に模索し続け、社会にアピールしていくべきだと考えています。

これからの熊本県立大学

キャリアセンターを設置します

熊本県立大学では、充実した教養教育・専門教育のカリキュラムと、様々な就職支援・資格試験対策などのプログラムを中心としたキャリアサポートとを、キャリアフォリオを活用して有機的に結びつける独自のキャリアデザイン教育システムの構築に取り組んでいます。

平成20年度は、カリキュラムにおいて、キャリアデザイン科目群を中心にキャリアデザイン教育のシステム化を図ったところですが、このシステムを具体的に機能させるための効果的な支援や、学生が自分にあった進路・就職先を選択するための様々な支援を効率的に実施することができ組織を整えることとしました。

平成21年4月からは、就職センターをキャリアセンターに改組し、センター長及びキャリアコーディネーターを置き、学生に対するキャリアデザイン教育と就職支援等のキャリアサポートの推進を図ります。

具体的な取組として、学生が利用しやすい環境を作るために、センター内を改修し、面接室を確保しました。また、キャリアサポートに関して、これまでの就職アドバイザーに加えて学生支援課の担当職員が常駐することにより、窓口を一本化することとしました。

なお、キャリアセンターの開設を記念してフォーラムを開催する予定です。開催日時などの詳細は、大学ホームページ及びキャリアセンターホームページ(<http://www.puk-c.jp/>)でお知らせします。



※本学では学生一人ひとりが大学での学習内容や様々な活動を記録するポートフォリオを「キャリアフォリオ」と呼び、学生にファイルを配布しています。

社会人の学び直しニーズにお応えします！

近年は、キャリアアップや時代への対応を求め、社会人の「学び直し」「継続教育(CPD: Continuing Professional Development)」の気運が高まっています。本学は、地域における「「キラリと光る」知の拠点」の形成を目指し、特にこうしたニーズに応えるため、熊本県や業界のみなさんと連携したオープンシンポジウムや学習会などを開催し、多くの方々にご参加いただいています。平成20年度は17のプログラムを実施しました。

主な開催実績 (開催日、主な対象者)

- オープンシンポジウム「市民と公園・公園と管理」
(4月3日、公園管理者、行政担当者)
- 失語症会話パートナーシップ講座
(第1回：7月20日、第2回：2月22日、言語訓練関係者等)
- 帰国・外国人児童生徒の日本語の先生と担任のための研修会
(8月6日、教職員対象)
- 食・環境シンポジウム～あなたの食が地球を変える～
(8月9日、食育、食品、栄養関係者)
- 中学校技術科教員を対象とした教材作成講座
(8月18～20日、中学校技術科教員)
- 英語教育シンポジウム
～授業実践を基に実践的コミュニケーション能力を考える～
(11月15日、英語教員)
- 地域連携学習会「くまもとブランド塾」
(基礎コース：9月16・17日、実践コース：10月6・7日、経営者、商品開発担当者等)
- 地域連携学習会「くまもとUD観光フォーラム」
(2月7日開催、福祉・観光関係者)

来年度以降も、教員免許状更新講習をはじめ、社会人の多様な学び直しニーズに対応したCPDプログラムを提供することとしています。(教員免許状更新講習については、P15をご覧ください。)



中学校技術科教員を対象とした教材作成講座の様子

活躍する卒業生

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。

熊本県立大学在学時には、交換留学生としてモンタナ州立大学ビリングス校へ留学。その後、モンタナ州立大学ビリングス校大学院に進み、現在は、アメリカの投資コンサルタント会社でマネージャーとして活躍する野田さんにお話を伺いました。

投資コンサルタント会社
(Optima Capital Management, Inc)
マネージャー
野田 久美さん



Profile
プロフィール

熊本県立大学総合管理学部1999年卒。1998年交換留学生としてモンタナ州立大学ビリングス校へ留学、2004年モンタナ州立大学ビリングス校大学院卒。2006年11月から現職。

地域に学び、 国際的な視野で総合性を実践！

一人で何役もこなすマネージャー

現在はアメリカモンタナ州の投資コンサルタント会社で、リサーチ/社長秘書/オペレーション/経理と一人で何役もこなすマネージャーの肩書で働いています。最近、日本でもファイナンシャルアドバイザーという資格を耳にすると思いますが、そのアドバイザーを個人で行っている会社です。仕事を得るきっかけは、現在の社長が以前マネージャーをしていた会社で一時期働いたことがあり、社長が自分で会社を始めアシスタントが必要になった時に、声をかけてもらいました。大学の専攻がファイナンスだったわけではありませので、現在、オンラインでCFP (certified financial planner) のクラスを取っています。将来は資格試験に合格して、社長の片腕として働くべく日々学んでいます。

総合管理学部（情報管理コース）で得たもの

すべてのビジネスはいかに情報を収集、分析、管理、発信するかにかかっていますから、情報処理の能力は非常に大切です。さらに、当時は英語のクラスが必須科目ですべて外国人の講師でしたから、ビジネスで必ず英語の能力は役に立つという確信がありました。

大学で学んだ事によって、情報収集と情報分析の能力がついたこと、レポートを書く能力や効果的なプレゼンテー

ションの能力がついたこと、自分の可能性を引き出したことですね。

大学生活を有意義に過ごすために

大学のゼミやサークル、アルバイトでも、人生そのものが人とのつながりで成り立っているの、ネットワーク作りは非常に大切です。また、自分への投資、例えば、英会話や資格試験など、興味のある事はまず始めて下さい。

就活と就職、恋愛(婚活)と結婚は人生の自分探しの一環ですから、自分をよく知ることが何よりも重要です。いったい今の自分は、何が好きで何か嫌いで、何ができて何ができないのかなどをまず分析してみましょう。それから、常に先を見つめて自分の可能性を追求してください。探求心と好奇心を持って、失敗を恐れず、何事にもチャレンジすることが大切だと思います。

2008年の世界的経済危機で、就職氷河期が再び訪れているようですね。この厳しい状況の下で生き残れるかどうかは、今後の学生生活をどう過ごすのか、あなた次第なのです。

国際交流

～熊本で世界と向き合う～

International Exchange

留学生生活 レポート

昨年3月から今年の2月まで、特別聴講学生として、韓国の祥明大^{サンミョン}学校から熊本県立大学に来られた金^{キム}柳羅^{ユラ}さんに1年間の留学生生活を振り返っていただきました。

熊本県立大学での 留学生生活を振り返って

文学部 日本語日本文学科 特別聴講学生
金^{キム} 柳羅^{ユラ}さん

私は、2008年3月に交換留学生として韓国の祥明大^{サンミョン}学校から熊本県立大学に来ました。熊本での生活は毎日がとても楽しく、1年があっという間に過ぎてしまいました。日本に来て最初の頃は家族も友達もいない外国でうまくやっていけるだろうかと、とても不安でしたが、今ではもう韓国に帰りたくない気持ちでいっぱいです。

熊本県立大学では主に日本語日本文学科の授業を受け、サークルは国際倶楽部に所属していました。日本語日本文学科や国際倶楽部の友達は皆とても優しく、日本語がまだ上手ではない私にいろんな日本語や日本の文化について教えてくれたり、週末や休みのときには、熊本の素敵なおところにたくさん連れて行ってくれました。留学生として多くの日本人と交流できたことは、私にとってすごく貴重な経験で、自分の国との文化の違いを感じることで、視野が広がったと思います。他の国からの留学生と交流することもできたので、以前の私に比べて、他の国との文化の違いを理解できるようになったと思います。

韓国についていろいろ聞かれることが多かったのですが、今まで自分の国のことをちゃんと知ろうと考えたことがなかったので、答えられないこともありました。その時に、国際交流はまず自分の国のことをちゃんと理解しないと他の国の方たちとも交流ができ



1番左がキム・ユラさん、右側のお2人は同じ祥明大^{サンミョン}学校からの交換留学生
ソン・ジンヒさんとキム・イェニさん

ないということを実感しました。2009年1月に大学の食育の日に韓国料理について紹介する機会をいただきました。最初は韓国で何を食べていたのか、何を紹介すればいいのかとても迷いましたが、食育の日のおかげで韓国の料理や食文化について改めて知ることができ、とてもいい経験になったと思います。自分の国のことを少しずつ理解していきながら、他の国の人と交流するときと自分に利益になると思います。

私の留学生生活は、何もかもが初めてすることばかりで、いろいろなチャレンジすることが多かったです。チャレンジすることで一番大事なのは怖がらずに飛び込むことだと思います。失敗しても失敗したことでそこにはきっと得られることがあると思います。いろいろな友達やその家族、先生方に大変お世話になった留学生活でしたが、その方達のおかげで自分の人生で貴重な1年になりました。これからも絶対熊本での1年間は忘れられないと思います。



熊本県立大学は、「地域に生き、世界に伸びる」のスローガンのもと、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。

地域と、それにつながる世界へ開かれた知的創造の拠点となるべく、「アジア・太平洋地域への指向」「多文化共生社会への貢献」の2つのキーワードを軸に、本学の規模・特性を活かした国際交流活動を推進しています。

地域と連携した 多文化共生 社会への貢献

本学では、今後予想される外国人住民のさらなる増加に伴い、官民一体となった多文化共生の地域づくりへの取り組みが求められる中、地域の多文化共生社会へのよりスムーズな移行へ貢献するべく、大学としての特性やノウハウを活かしながら、地域住民や地元企業等と連携を図っていくことを目指しています。

今回は、文学部日本語教育研究室で多文化共生プロジェクトに参加する赤島八生さんから「多文化共生クラスター」の取り組みを報告してもらいました。

多文化共生クラスター

赤島 八生さん

(文学部 日本語日本文学科 2009年3月卒)



日本語教育研究室は、2004年度から県内の団体との協働で「多文化共生プロジェクト」に参加しており、毎年開催されている「生活日本語ボランティア研修会」などの研修会や、その他催しの運営に携わっています。2007年度には、現在文学研究科2年の船本日佳

里さんが「多文化共生クラスター」という名の組織を立ち上げました。船本さんが「多文化共生クラスター」としたのは、熊本の外国人を取り巻く味も形も異なる多様な組織が、同じ幹や根を共有するものとして、支え合い、より深い相互関係を持って活動し、「ネットワーク」よりもつながりの強い「クラスター」*を形成していくようにと考えたからです。

現在「多文化共生クラスター」では月に一度の勉強会を行っています。日本に暮らす外国人に関する制度や諸状況を学び、国際理解教育を進めています。2008年12月18日には「第1回多文化共生クラスター講演会」を開催しました。長岡市国際交流センター長の羽賀友信さんをお招きし、災害時における外国人支援についてお話しいただきました。

並行して、熊本県在住の外国人の現状把握のためのフィールド調査を行っています。外国人の方々や、留学生のお世話をしている日本人の方々へのインタビューや、熊本県に暮らす外国人、日本人、支援団体関係者へのアンケート調査です。2008年度に行ったフィ

ールド調査では、熊本県の多文化共生に向けた施策が始まったばかりであること、多くの日本人が、外国語での情報提供、郵便局や病院など多くの施設に通訳を置くべき、といった地域の多言語対応の必要性を感じていることが分かりました。その他、外国人が多く暮らす団地での日本人住民と外国人住民との摩擦、ここでは外国人の人々が「地域のルールは守っているし、暮らしよい」と感じている一方で、日本人住民が「迷惑をかけないでほしい、ルールを守ってほしい」と不満を感じているという実態も明らかになりました。その上、これらの問題に対して「自分達で解決を」という行政の対応を受けたという声もありました。しかし、今回知られた状況はごく一部です。今後は、今回調査の行き届かなかった、熊本市外の諸状況についても調査を続けたいと思っています。

将来的には、「多文化共生クラスター」の規模を拡大し、多文化共生に関する学習会を日本語教育研究室だけでなく、他学部の学生にも参加を呼び掛け、熊本県立大学の年間授業に盛り込むことで広く知識や情報を共有し、熊本県の多文化共生の発展に繋げることを目標に掲げています。

※「クラスター(Cluster)」とは、「(ブドウなどの)房」「(魚などの)群れ」の意から、転じて群や集団を表します。産業界などではよく使われる言葉です。



第1回多文化共生クラスター講演会

〈未来〉を獲得するための〈歴史〉



文学部 講師

大島 明秀

〔プロフィール〕

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程修了。博士（比較社会文化）
2008年4月から現職。

歴史学研究室

本研究室は本学唯一の「歴史学」研究室です。そのため、様々な分野・時代にわたる歴史研究を志す学生が来ることを想定して、日本史や熊本郷土史は勿論ですが、東洋史や西洋史、或いは文化史、科学史、思想史もその範疇として、広い視野から講義や学生指導を行っています。

私自身は、近世・近代の日本を中心的視座として、アジアやヨーロッパとの交流の〈実態〉解明に取り組んでいます。また、その一方で、〈実態〉とは乖離したイメージが人々の頭の中に歴史的に形成される現象（言説）についても追究しています。

著書

近年は、特に長く江戸時代を表象してきた「鎖国」概念を研究主題としてきました。近世の日本は、生糸をはじめとして物資は常に対外依存状態であり、琉球王国、朝鮮王国、中国、オランダなどと定期的な交流をしていました。しかし実態が「鎖国」ではなかった江戸時代を、「鎖国」をしていた閉鎖的な時代と眼差してきた〈事実〉が今なお確かに存在します。なぜ、いつ、そしてどのように〈日本人〉にそのような過去に対するイメージ（自己像）が浸透し、根付いたのでしょうか。それについて解明した成果を、『「鎖国」という言説—ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史—』（ミネルヴァ書房、2009年1月、A5/524頁）としてまとめました。



表紙と裏表紙

私の試みは「鎖国」研究史上初めてのもので、様々な意味で大変でした。大変だった例を一つ挙げると、本書では東西の近世・近代を視座としたため、複数言語にわたる史資料（くずし字、漢文、英語、ドイツ語、オランダ語、フランス語、イタリア語、スウェーデン語、



「富永家文書」の整理風景

ラテン語等）を用い、また、複数の学問分野と時代区分までも〈越境〉する必要に迫られたことです。

古文書講座、勉強会、社会活動

学生および図書館職員を対象に、週2回古文書講座を開いています。いわゆる「くずし字」を読む技術を身につける練習をしているのですが、受講者にとって今まで文字列とさえ見えなかった〈日本語〉が、半年もすれば徐々に読めるようになります。それは本当の意味で〈過去〉に触れる営みです。これまでに学部を問わず学生・社会人延べ30人以上が参加し、非常に楽しく活気のある、私にとっても楽しい時間となっています。

また、この不平等な〈格差〉に満ち溢れた世界の中で生きている個人々が、どのように暴力構造に（加害者、被害者、第三者として）位置付けられているのかを認識すること、そしてそれらを〈是正〉すべくどのようにアクションを起こすべきかを対話し考えていくことを目的として、週1回「在日コリアン」、「アイヌ」、「ハンセン病」などについての勉強会も開催しています。

それとは別に、私は、戦争や紛争で傷ついた世界中の子どもたちを医療援助している Friedensdorf International（ドイツ国際平和村）に対して、微力ながら登録「サポーター」として毎月継続的に支援を送っています。その他、地方や労働者に行われている切り捨てや、或いは〈ホームレス〉などへ援助が行き届いていない現状についても真剣に向き合っています。

富永家文書の整理

本学図書館には、江戸後期・明治以降にかけての熊本（上益城郡）の豪商富永家に関連する古文書が眠っており、地域貢献事業および教育の一環として、図書

館の協力を得て月1～2回のペースで整理に着手しました。この「富永家文書」は総数6000点以上、それに加えて内容の密度も濃く、研究者にとって垂涎の史料です。実際、町史編纂事業を開始した甲佐町役場が視察にやって来ました。この史料の利用によって幕末・近代の熊本地域史が塗り替えられる日が一日も早く来ることを願い、学生とともに難解な字の解読と閲覧体制の整備に取り組んでいます。そもそも江戸時代に書かれた本物の史料に触れること自体が学生にとって他所では味わえない貴重な体験であり、それをこのような身近な場所で定期的に提供できることが私の何よりの喜びとなっています。

歴史とは

「過去」を知ることは、「現在」を批判的に眺めることです。それこそが私たちの手で「未来」を創っていくという営為です。私の研究室は、そのような「未来」の在り方を考えるための「歴史」を学ぶ場です。さらに大事なことは「学ぶ」にとどまらず、それをどのように「実践」に繋げていくかを考えることです。〈歴史〉は紙の上で行われているのではなく、一人一人の人生が積み重なったもので、私たちの人生も瞬間も全一生生きるということ一が、〈歴史〉そのものだからです。一人でも多くの学生がこの場に参加し、既成の枠を〈越境〉し、許し難い暴力に〈抗い〉ながら、個人の尊厳と責任を持って他者を思いやって生きる〈仲間〉へと育ってくれることを願っています。

大学の動き



九州巡回リレー講義第1弾！ 「熊本県立大学かごしま講演会」を開催

県外での広報活動を強化するため、本学教員による講演会を九州各県で開催することとしました。その第一回を平成20年11月29日（土）に鹿児島県文化センターを会場に開催しました。講演会では、古賀実副学長の進行により、蓼茂寿太郎理事長、有蘭幸司教授、吉井誠教授から開催地鹿児島の話題に触れながら各々の研究内容について講演があり、43名の参加者に本学の存在感を強くアピールすることが出来ました。開催にあたっては、同窓会紫苑会鹿児島支部にご協力いただきました。



熊本信愛女学院高等学校 二平京子校長(左)と
熊本県立大学 高大連携プロジェクトリーダー 半藤英明文学部教授(右)

熊本信愛女学院高等学校と 高大連携協定締結！

本学では、教育内容・方法の改善並びに地域の教育力の向上を図ることを目的として、高大連携の取組を行っています。これまで、高大連携モデル校5校（全て県立高校）と各モデル校の特徴、ニーズに応じた取組を中心に進めてきました。このたび、熊本信愛女学院高等学校との間で高大連携に取り組むことで合意し、私立高校との間では初めてとなる高大連携協定を締結しました。今後、文学部を窓口として、まずは高校の国語科教育に大学での最新の研究成果を組み込んでいく取組を行います。

Information

ますます便利に！ 情報ネットワーク環境をパワーアップ

情報化時代にふさわしい快適・便利・安全な情報ネットワーク環境の実現に向け、昨年、学内LANを一新し、スピードアップや利便性向上、セキュリティ強化を図りました。平成21年度は、Webメール「Active! mail」や無線LANの導入、情報処理実習室及びCALL教室の最新設備化を予定しています。

また、「学長への提言広場」については、学外の端末から利用いただけるように改善します。学生の皆さんからの提言をお待ちしています。

問い合わせ先／熊本県立大学 TEL096-383-2929（代）

- 情報ネットワークは、学術情報メディアセンター（内線603）
TEL096-321-6645（ダイヤルイン）
- 学長への提言広場は、企画調整室（内線225）
TEL096-321-6604（ダイヤルイン）

大学施設の名称が変わります

熊本県立大学が、在学生・教職員はもちろん、地域の皆様により親しみやすい施設となるよう、名称の変更を行います。その第一歩として、第1グラウンド及び第2グラウンドの新名称を募集しました。その結果、新しい名称は、所在地と施設の状況を勘案し、それぞれ「月出フィールド」「小峯グラウンド」に決定しました。

なお、現在、大学施設（建物、講義室等）の名称の変更も検討しています。新名称は決定次第、大学ホームページや学内プラズマディスプレイ等でお知らせします。

問い合わせ先／熊本県立大学総務課

TEL096-321-6607（ダイヤルイン）

TEL096-383-2929（内線240）

人事 (平成21年4月1日付)

■採用

文学部 教授 村里 好俊
総管理学部 助手 相良 宗臣

■昇任

環境共生学部 教授 メルトン ジェー
総管理学部 教授 明石 照久
総管理学部 教授 今里 佳奈子
総管理学部 教授 棟方 信彦

■センター長就任

地域連携センター長
環境共生学部 教授 篠原 亮太
キャリアセンター長
総管理学部 教授 津曲 隆
保健センター長
文学部 教授 田中 宏尚



学術奨励賞を受賞した古賀敦子さん(左)

熊本県立大学大学院文学研究科 博士後期課程開設記念 「学術奨励賞」受賞者決定

平成20年4月の大学院文学研究科日本語日本文学専攻博士後期課程の開設を記念して、大学生及び大学既卒者を対象に、日本語、日本語教育または日本文学に関する論文を募集しました。

県内外から7編（県内5編、県外2編）の応募があり、新見性に富み学術的価値が高い論文として、「学術奨励賞」に古賀敦子さん(23歳、会社員)の「名詞『ーさ』基本構造の理解」が、「審査員特別賞」に猪口由男さん(59歳、高校教諭)の「恋歌考」が選ばれました。



熊本県立大学「中学生未来作文コンテスト ～地球に生きる私たちの未来～」実施

平成20年夏、中学生を対象に地域の身近な話題から、省エネルギーや環境問題、気候変動や地球温暖化等について、地球市民の視点で書いた作文を募集し、県内の中学校41校752名の方から応募がありました。審査の結果、最優秀賞 吉井慎さん（水俣市立久木野中学校3年）をはじめ、優秀賞2名、佳作6名、富士電機システムズ賞1名、審査委員会特別賞3名を、また優秀学校賞として熊本市立託麻中学校と西原村立西原中学校の2校を選び、表彰しました。

受賞された作文については、作品集を作成するとともに、大学ホームページにも掲載します。

後援会便り

（学生共同自主研究助成事業の一例）

木でつくる遊び場プロジェクト ASOVIVA

木材で遊具を考案・製作し、子供たちにもっと木に触れる機会を増やし、木の良さを知ってもらおうと活動しています。数グループに分かれ、それぞれで様々な工夫を凝らし製作しています。



白亜祭(学園祭)で展示した遊具

後援会とは、

- 本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

【後援会の事業】

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座として、公務員講座、二級建築士講座、簿記講座等を開催。
- 適職診断プログラムの実施、各学部による就職支援事業への助成、OB・OGと連携した就職支援事業等の展開。

《学生活動支援事業》

- 各サークルの活動費の一部、全国大会出場経費等の一部を助成。
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し、図書館へ配置。

《国際化推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費の一部を助成。
- 留学対策講座の開催。

《教育研究助成事業》

- 学生共同自主研究助成
（学生グループが自主的に行う研究経費の一部を助成）
- 国内学生大会等出場助成
（インターゼミナール等への出場経費の一部を助成）

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

NHK全国大学放送コンテスト入賞!! MR研究会

昨年8月に発足したばかりのMR研究会は、同年12月に京都市で開催された第25回NHK全国大学放送コンテストのDJ部門において見事3位入賞を果たしました。

今後の活躍が期待されるMR研究会の活動を、内田会長に伺いました。

私達MR(Media and Radio)研究会は、昨年8月に発足した同好会です。当会の目標として「ラジオを中心とした放送研究を通して、放送分野におけるゼネラリストの育成を目指す」ということを掲げ、日々活動しています。放送研究の一環として、Podcast[※]でのラジオ番組の制作を行っており、定期的に2つの番組を配信しています。その1つの「Midnight Radio Space」という番組内では「県立大インフォメーション」というコーナーを設け、大学や地域の情報を発信しています。また、会員の放送技術などのスキル向上を目的とした「スキルアップ講座」というものも定期的に行っています。このスキルアップ講座には「実際の放送現場の体験」を目的として、放送局の生放送見学や地域イベントのステージ司会など、機会がある限り現地に出向いて体験するプログラムも組んでいます。

これらの活動以外にも昨年度は大学放送系サークル最大規模の大会である「第25回NHK全国大学放送コンテスト」への出品を行いました。当会からは4作品をコンテスト予選に出品し、DJ部門(自由なテーマを定めた6分±15秒の番組を作成し、番組構成やDJの技術力などを競う部門。番組の中で楽曲の紹介も行う。)で2作品、音声CM部門で1作品の計3作品が昨年12月に京都で行われた本選に進みました。結果として、DJ部門「Forget-me-not」が全国3位入賞を果たし、その他にもDJ部門全国4位、音声CM部門全国11位という成績を残す事が出来ました。

全国最大規模の大学放送コンテストで予想以上の成績を残すことができ、多くの方々に声をかけて頂けるようになりました。しかし、新2年生のみで立ち上げた日の浅い同好会ということもあり、放送技術は勿論のこと、組織運営や業務効率、マンパワーの不足といった課題が多いことも事実です。これらをいかにして解決し、よりよい方向へ持っていくのかという点が、今後の課題となりそうです。当会では、常に皆様からの声を募集しております。



MR研究会 会長
内田 圭亮さん
(総管理学部 2年)



当会制作のPodcast番組
「Midnight Radio Space」の収録風景



第25回NHK全国大学放送コンテストDJ部門の発表風景

当会制作番組に対するメッセージや、地域イベントの情報、放送面での協力依頼などがありましたら可能な限り対応し、反映していきます。今後、放送研究を通して得た経験やスキルを大学や地域に還元出来るような活動を会員一丸となってやっていければと考えております。

※インターネットラジオを自動録音して、収集された放送を好きなときに聴取するシステム



スキルアップ講座の講義風景

[MR研究会ホームページ] <http://mrstudy.web.fc2.com/> [お問い合わせ] mrstudy@live.jp

大学からのお知らせ

教員免許状更新講習を8月に開講します ～現場の実践に役立つ講習を数多く準備～

本学では、「地域に生き、世界に伸びる」をスローガンに掲げ、地域との連携・交流により地域が抱える課題の解決や、研究成果を地域に還元するための取組を積極的に行っております。また、教職課程認定大学として、数多くの教員を輩出してまいりました。本講習は、そうした取組の一環として開講します。

必修領域科目は、50人の少人数クラスで丁寧な講習を行います。選択領域科目は、ことばと読みの正解を問い直す国語科教育、演習形式で受講者参加型の英語教育、身近な材料で学ぶ環境教育、ICTで創るすぐ使える授業など、15人～30人のクラス単位で、現場の実践に役立つ講習を数多く準備しております。開講期間は、8月17日(月)～8月25日(火)で、免許状更新に必要な30時間の講習課程を、短期間で修了することができます。本学は交通アクセスに恵まれ、広い駐車場もあります。

スケジュールや申込方法などの情報については、大学ホームページをご覧ください。

問い合わせ先／熊本県立大学教務入試課教務班

TEL096-321-6609(ダイヤルイン) TEL096-383-2929 (内線207)

E-mail:menkyo-koshin@pu-kumamoto.ac.jp

Skill UP

おすすめの1冊

環境共生学部 教授
大岡 敏昭

『幕末下級武士の絵日記 その暮らしと住まいの風景を読む』

大岡敏昭著 相模書房 1470円



貧すれど鈍せず

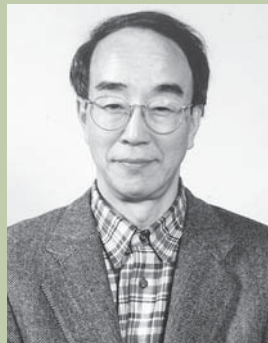
ーこころ優しい下級武士たち

恥ずかしながら拙著を紹介します。私は、これまで近世の中下級武士の住まいについて研究をしてきました。ところが、そのような住まいや町での生活がよくわからなかったのですが、幸いにも幕末の忍藩（現埼玉県行田市）下級武士の絵日記に出会いました。

拙著はその絵日記から当時の生活を読み取ったものです。絵日記を書いたのは尾崎石城という武士ですが、藩に上書して百石から十人扶持に下げられた謹慎の身です。でもそのことに屈せず日々淡々と生きています。

下級武士たちの生活は貧しいものでした。その不安定な生活から寒服（^{あわせ} 袷の着物）はなく、わずかの髪結い料にも困ることがあるが、一方で料亭に繰り出したり、自宅で友人たちと酒宴をすることも多い。そこでは何とまぐろの刺身をよく食べていました。また持ち合わせがないときは着物や帯を金に換え、それで肴を買って友人たちをもてなす。寺の和尚や町人たちとの交流も盛んであったが、困っている人がいれば、皆で支え合い、有り金をはたいて窮乏を助けたりもする。

この絵日記に登場する人びとの生活に、貧乏をはじき返すおらかさ、豊かさを感じるの、人への思いやりとところの優しさがあったからだと思います。



図書館古文書 ライブラリー

熊本県立大学学術情報メディアセンター(図書館)に
収蔵する貴重資料を紹介します。



Encyclopédie(フランス百科全書)

[初版]全28巻(1751-1772):本文17巻、図版11巻

※上記のほか、1776年以降に刊行された図版の続き1巻、補遺全4巻、目次全2巻

世界の社会制度や国家制度の枠組みの形成に大きな影響を与えたフランス革命前の18世紀半ばに、啓蒙思想家デイドロと数学者・物理学者グランベールが20年以上の歳月をかけて啓蒙思想を集大成したものです。執筆者はこの2人のほかに、ヴォルテール、モンテスキュー、ルソーなど多くの錚々たる啓蒙主義者たちです。

『百科全書』には日本に関する記述も見られます。特に、日本文字について、「ひらがな」、「カタカナ」のほか、内裏でしか用いられない文字「やまとかな」が解説とともに紹介されています。

解説:総合管理学部 教授 渡邊榮文

「春秋彩」へのご意見・ご感想お待ちしております。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502 (住所記載不要)
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」 担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行:熊本県立大学

〒862-8502 熊本市月出3丁目1番100号
TEL 096(383)2929(代)
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/

再生紙を使用しています



この印刷物は大豆インキを使用しています